

当院における遷延性・慢性咳嗽の原因疾患の検討

土方寿聡、竹村昌也、浅野貴光、市川博也、横山みどり、上村剛大、國井英治、川口裕子
高桑 修、大久保仁嗣、前野 健、小栗鉄也、中村 敦、新実彰男
名古屋市立大学病院 呼吸器内科

【目的】当院における遷延性・慢性咳嗽患者の原因疾患とその臨床像を検討した。

【方法】2012年4月以降に咳嗽を主訴に当科喘息・慢性咳嗽外来を受診した初診患者33例（女性19名、平均年齢48.6歳）を対象とした。原因疾患を『咳嗽に関するガイドライン第2版』に沿って診断し、各疾患の頻度などについて後ろ向きに検討した。

【結果】咳嗽持続期間中央値は4.0ヶ月（3週～20年）。原因疾患は、咳喘息8例（24%）、GERD5（15）、感染後咳嗽4（12）、副鼻腔気管支症候群（SBS）3（9）、原因不明2（6）、2疾患以上の合併症例は11（33）であった。合併症例はすべてGERDとの合併例であり、合併例を重複して数えると咳喘息 18例（54%）、GERD 16（45）、SBS 4（12）、感染後咳嗽4（12）、心因性1（3）であった。診断確定までに要した期間は、咳喘息0.95ヶ月、GERD 1.18、咳喘息とGERDの合併例1.77であり、群間に有意差（ $p=0.043$ ）を認め合併例で長い傾向がみられた。

【結論】遷延性・慢性咳嗽の原因は既報の通り咳喘息が最多であるが、GERDやGERD合併咳嗽患者も多くを占めた。GERD合併例では治療反応性でみた診断確定までの期間が長かった。